

# サルインジャーにおける二元論的対立

持 留 浩 二

〔抄 録〕

本論文はJ・D・サルインジャーがその習作期からずっと悩まされ続けた二元論的対立の問題を取り上げ、その対立の問題がその後どのように展開していったのかを明らかにしている。精神と物質、芸術主義と商業主義といった対立の問題は彼の様々な作品でメインテーマとなっている。代表作『ライ麦畑でつかまえて』の成功まではその二者の対立に何らかの和解策を模索していたサルインジャーだったが、『ライ麦畑』の成功を機に、精神主義的、芸術主義的な方向へと大きく舵を切ってしまった。『ライ麦畑』による経済的成功と作家としての確固たる地位がそれを可能にさせてしまったのである。サルインジャーについてはいくつかの伝記が書かれているが、本論文はその伝記的事実に注目し、彼が作家としてデビューし、習作期を通して、成功し、衰退していく際に彼の人生に起こった出来事と彼の作品との関係を明らかにしている。

**キーワード** サリンジャー、二元論的対立、伝記、執着

## 序論

かつて批評家のイーハブ・ハッサン (Ihab Hassan) はJ・D・サルインジャー (J. D. Salinger) の作品に登場する人物は大きく二つのグループ、つまり「自信たっぷりの俗物」(“the Assertive Vulgarians”)と「繊細なアウトサイダー」(“the Responsive Outsiders”)に分けられると指摘した<sup>(1)</sup>。確かにサルインジャーの作品にはこの二つの勢力のせめぎ合いが描かれている。「繊細なアウトサイダー」側にいるサルインジャーにとって、どうすれば「自信たっぷりの俗物」とうまく折り合っていけばいいのかということは極めて大きな関心事であった。

代表作である『ライ麦畑でつかまえて』(The Catcher in the Rye)においては、「繊細なアウトサイダー」代表の主人公ホールデン・コールフィールドが「自信たっぷりの俗物」たちに悩まされはするものの、エンディングにおいて一定の和解を果たしたことが仄めかされている。彼の「自信たっぷりの俗物」たちに対して抱く親近感がそれを示している。

しかし『ライ麦畑』で見せたこの二者の和解は長続きしなかった。『ライ麦畑』の大ヒットにより一躍作家として成功したサリンジャーはその後シーモア・グラスを中心とするグラス家の人々に関する一連の物語を書き続けるが、その中では「繊細なアウトサイダー」であるグラス家の人々が一方的に自らの主張をし、「自信たっぷりの俗物」との対話が見られないばかりか、俗物の姿が描かれることすら極めて少なくなってしまう。『ライ麦畑』の成功により一流の作家として出版社に対して優位に立ったサリンジャーは、自分の好きなように作品を書き、編集者の指摘には耳を貸さなくなってしまうのであるが、それとともに彼の作品においても、俗物たちは徐々に姿を消し、サリンジャーが最後に発表した「ハプワース16、1924」(“Hapworth 16, 1924”)においては、俗物は完全に沈黙してしまった。

自分に異議を唱える者の排除は、何も彼の作品の中にのみ見られるものではない。実際の生活においても、自分の主義と反することを言ったという理由だけで、サリンジャーは多くの友人たちとの関係を完全に断絶させた。その結果何が起こったのかは、とても孤独で寂しい彼の老後を見れば一目瞭然である。一方的な他者との関係断絶は彼の心に大きな空虚を与えた。そしてそれは同時に、彼の作品を味気ないものにし、作家としての命を終わらせてしまったのだ。

文学は我々に娯楽と教養を与えてくれる。我々はどう生きていけばいいのかを文学から学ぶことが出来る。同様に、作家の人生からも我々は何かを学びとることが出来る。サリンジャーの作品と人生から一体何を学びとることができるのだろうか。

## I 二元論的対立

サリンジャーはいくつかの二元論的対立に苦しんだ作家である。まずは精神と物質である。この二者の葛藤はアメリカ文学において時々取り上げられるテーマでもある。遡ると19世紀アメリカン・ルネッサンスの時代にラルフ・ウォルドー・エマソン (Ralph Waldo Emerson) やヘンリー・デイヴィッド・ソロー (Henry David Thoreau) によって取り上げられている。そしてアメリカでこのテーマが問題とされる時には必ずと言っていいほど、東洋宗教思想が脚光を浴びる。エマソンやソローも東洋思想に注目し、「内なる神」という伝統的なキリスト教では少々異端的とも言える考えに解決を求めた。

サリンジャーもこの葛藤への解決として東洋宗教思想に傾倒した。彼が禅仏教に傾倒したことはよく知られているが、作品の中でもあからさまに東洋宗教思想の価値をアピールしている。短編集『ナインストーリーズ』(Nine Stories)の最後に収められた短編「テディ」(“Teddy”)はそれが顕著に現れた作品で、それゆえ作品自体が台無しになったという評価をする批評家は多い。文学と宗教は違う。文学にはリアリティあふれる人間描写が求められる。「テディ」にはリアリティあふれる人間性はあまり描かれておらず、その代わりに東洋宗教思想の説明のようなものが作品の大半を占めているのである。

次に芸術と商業主義の対立である。彼は、作家となって間もない頃に『コリヤーズ誌』(Collier's)に掲載された「ある歩兵についての個人的メモ」(“Personal Notes of an Infantryman”)のような商業的な作品を次々と生み出した。彼は自分の作品を、商業誌向きの単純な作品とニューヨーカー誌を標的とする良質な作品とに分けていた。本来なら自分が考える良質な作品ばかりを書きたかったのだが、生活のためには、内容は薄い「スリック」と呼ばれる高級雑誌の読者に受けが良さそうな軽妙な作品も書かなければならなかった。しかしそういう作品を出版してしまうといつも自分の才能を浪費したことへの罪悪感が後に残った<sup>(2)</sup>。

精神と物質、そして芸術至上主義と商業主義という二元論的対立は、ハッサンが言った「自信たっぷりの俗物」と「繊細なアウトサイダー」の対立と符合する。「繊細なアウトサイダー」は精神や芸術至上主義を重んじ、「自信たっぷりの俗物」は物質や商業主義を重んじる。サリンジャーはこの世界の人間をこの二種類に分ける。「繊細なアウトサイダー」側にいる彼が、どのようにすれば「自信たっぷりの俗物」とたちと和解できるのかというのが彼の文学、もっと言えば、彼の人生の大きな課題であった。事実彼の代表作『ライ麦畑でつかまえて』においてはその和解らしきものが描かれているのである。

1943年4月にサリンジャーの代理人が「ヴァリオニ兄弟」(“The Varioni Brothers”)を『サタデー・イヴニング・ポスト誌』(Saturday Evening Post)に売った。これはアメリカを代表する雑誌で、『コリヤーズ誌』よりも人気も格も上、発行部数も当時400万部を超えており、原稿料も相当な額であった。「ヴァリオニ兄弟」は世俗的成功を求める音楽家の弟サニーと、彼とは逆に芸術性を追求する作家の兄ジョーという兄弟を描いた物語である。野心家の音楽家サニーは、ジョーに小説をあきらめさせ、自分の歌の歌詞を書かせる。繊細で弱いジョーはそれに抵抗することができず、言われるとおりにする。歌はヒットし、二人は富と名声を得る。

サリンジャーは、自分の中の二つの面をそれぞれ兄と弟に投影して作品を描いたのだろう。ジョーはサリンジャー自身が理想とする純粋に芸術性を追求する面であり、サニーは富と名声に執着する、生活のために商業的作品を書く現実主義の面である。サニーというのは若き日のサリンジャーの呼び名でもあるところが興味深い。実際に若き日のサリンジャーは生活のために書くことをいとわなかったし、世間で受ける作品を書くために、雑誌の編集者からのアドバイスを素直に聞くなど、自分の芸術に関して妥協もした。

ヴァリオニ兄弟はサリンジャーが持つ二つの面を代表した人物として描かれているのであるが、これら二つの面についてこの作品からは明白に教訓が読み取れる。物語の結末では、世俗的成功に執着するサニーが真の芸術を求める兄のジョーを破滅させてしまう。ある夜パーティーで、ジョーはサニーと間違われてギャングに射殺されてしまうのだ。サリンジャーは、自分の商業的な成功が、純粋な芸術性を押しつぶしてしまうのではないかという怖れを抱いていたのであろう。

サリンジャーは常に芸術家にとって商業主義は絶対的な悪であると考えていた。イアン・ハ

ミルトン (Ian Hamilton) は『サリンジャーをつかまえて』 (*In Search of J. D. Salinger*) の中で、この物語は商業主義の弊害に関する寓話であるとした上で、「ジョーは偶然にもギャングに殺されてしまい、ソニーは、ジョーが残した原稿の断片から彼の傑作を繋ぎ合わせるのに一生をかけるのである。これはバディ・グラスがシーモアの代わりに尽くす努力を予示していると言える」と指摘している<sup>(3)</sup>。この指摘は全体的を射ており、この後何度もこのテーマはサリンジャーの作品で取り上げられる。サリンジャー研究の第一人者であるウォーレン・フレンチ (Warren French) もまた次のように指摘し、この「ヴァリオニ兄弟」とシーモアとバディの兄弟との関連に言及している、「「ヴァリオニ兄弟」は……いくつかの点で著者の最新作である「シーモア序章」にとってもよく似ている。どちらも才能ある大学の英語科教師を同情的に描いたものであり、世には認められなかった天才である彼の兄の素晴らしい遺作を公に発表する準備をすることが主な関心事となってしまった男を描いている。この天才たちは愛すべき変人であり、最終的に二人とも感受性の鈍い世界によって年若くして破滅させられてしまったのである」<sup>(4)</sup>。

「ヴァリオニ兄弟」と同じく初期のサリンジャーの作品の中で芸術至上主義と商業主義というテーマが真正面から扱われたのは中編小説「倒錯の森」 (“*The Inverted Forest*”) においてである。ケネス・スラウェンスキー (Kenneth Slawanski) はこの作品を通じてサリンジャーは「芸術と魂は同義語であるという確信と、インスピレーションは精神的な啓示と関係しているという信念を主張している」と指摘している (Slawanski 153)。

物語の内容は、ある身分の高い裕福な娘コリーンと、アルコール中毒の母親に虐待されて育ったレイモンド・フォードとの物語である。コリーンの書いた詩を批評した時、フォードは「詩人は詩を作るのではない。それを見つけるのです」と指摘する<sup>(5)</sup>。フォードによれば、真の芸術は作ることに出来るものではなく、ただ見つけれられるものなのだ。

フォードは彼女と結婚する。幼少期に虐待され心に傷を負ったフォードを妻のコリーンは救おうとする。フォードもそんなコリーンの導きに従って彼女の華麗な世界の住人となろうとする。しかし彼は社会でうまくやっていく準備が出来ていない。フレンチによると、「彼は「子供時代の信条」を卒業できないでいるので、彼の意見を求める洗練された人々の中にと落ち着かない。しかしコリーンはまだ自分の少女時代を取り戻そうとしているので、そんな彼を助けることが出来ないのである」 (French 72)。

幼少期に深いトラウマを負ったフォードは妻とうまく結婚生活を送り、社会に適応していけるわけなどなかった。彼はバニーという名の、かつての母を思い起こさせるような支配欲の強い若い女性に惹かれていく。最終的に彼はコリーンの元を去り、バニーと駆け落ちをする。バニーは明らかにフォードの母親の再来として描かれている。彼女は、彼の芸術的靈感を押しつぶし、彼を倒錯の森から追放しようとする冷酷な社会の代表なのである。なぜフォードがバニーを選んだのかについてハミルトンは次のように指摘している。

パニーは彼の母親と同じように、彼の守護者となる準備が出来ている。彼の面倒を看、何をすべきかを言ってくれる、そして何よりも重要なことであるが、彼女は彼が個人的な遊びをすることを許してくれる。彼がずっと子供であることを許してくれるのだ。……コリーンのようなタイプの女性は彼を人前に出せる人間、すなわち大人の男性にさせようと永遠に企てるのである。

……それはまた、コリーンに代表される如才ない文学の社交界との関わりの中で、サリンジャー自身のキャリアが予示されたものでもあった。(Hamilton 102-103)

スラウェンスキーは、サリンジャーが「倒錯の森」においてフォードという人物を通して芸術的及び精神的存在の三段階を見せているのだと言っている。第一段階は、母親の影響下に束縛された子供としてのフォードである。母親の破壊的とも言えるほどの強力な力はフォードを窒息させるほどの恐怖を与える。第二段階は、内部で成長する芸術的な精神によって母親の虐待を克服する大人の男としてのフォードである。内部で成長する芸術的な精神は、地下で枝葉を延ばす倒錯の森とパラレルな関係にある。彼は悲惨な過去を乗り越え、苦悩を抱えてはいるものの、一人の真の芸術家になっている。彼は、芸術という地下の世界と世俗的な世界との仲介者となっている。第三段階は、地上の世俗的な世界に出てきたものの、圧倒的な地上の破壊力が芸術家としての彼の精神力を上回ってしまう、破滅者としてのフォードである。(Slawenski 155)

この作品を書いていた頃のサリンジャーは、周りの社会にうまく適応しているかのようにあったが、作品においては精神的・芸術的な価値と相容れない社会を非難している。「倒錯の森」から読み取れるメッセージは、真の芸術家は、真理のみに関わって生きていくために社会から自分を切り離すべきだというものである。実際、徐々にサリンジャーにとって現実社会は価値を持たなくなっていった。宗教が全てになり、芸術がそこに結びつく。彼にとって、書くことと瞑想することは同義となり、彼は神のために書く作家となる。「最初は孤独の中で瞑想することを実践しなければ、神に精神を集中させることは非常に難しい。……瞑想するためには、自己の内部に閉じこもるか、人里離れた場所や森に隠遁しなければならない」という彼が当時師事していたベンガルの聖者シュリー・ラーマクリシュナの教えに従い、1952年から翌年にかけての冬に、ニューヨークの喧噪を離れ、彼はニューハンプシャーの田舎で宗教中心の生活を始めたのである (Hamilton 132)。

1949年後半頃、『ライ麦畑』執筆に専念するためにサリンジャーは気を散らすものを一切遠ざけた。さらに仏敎の禪を探求する意欲もますます強まった。1950年彼は高名な禪の師である鈴木大拙と知り合いになった。キリスト敎神秘主義と禪の思想が渾然一体となった大拙の思想と、芸術は精神性と結びついているというサリンジャー自身の確信とを統合させた時、執筆と瞑想は同じものだという信念が生まれた。瞑想するように執筆することは、孤独と集中力を必

要とした。知名度や名声がもたらす喧噪は彼の仕事と祈りの両方を妨げるものにしかならなくなったのである。

## II 執着という病いと排除の論理

スラウェンスキーによると、サリンジャーは生涯にわたって憂鬱症に苦しんだらしい。サリンジャーの度重なる憂鬱症はたいてい孤独によって起こるのである。一旦とりつかれると、憂鬱は他人から彼を遠ざけ、憂鬱を生む元となる孤独を深めてしまう。サリンジャーは自分の憂鬱を、シーモア・グラスの絶望を通して、ホールデンの挫折を通して、そしてX軍曹の惨状を通して表現していた。しかしほとんどの登場人物は、救いを与えられ、しばしば人との結びつきを通して健全さを取り戻していった。興味深いことに、作品中ではそれが憂鬱への解決に至る方法であると分かっていたはずのサリンジャーが、実際の生活において自身はそういう解決策をとろうとしなかった。これについては後でまた触れることにする。

サリンジャーが、ヴェーダントに惹かれたのは当然のことだった。ヴェーダントは禅と違って、神と個人的につながる道を示してくれた。サリンジャーにはそれが魅力的だった。サリンジャーは短編「テディ」（“Teddy”）の主人公テディを通じてヴェーダントの主要な教義を分かりやすく説いている。テディは愛と感傷の違いを指摘し、感傷はあてにならない感情だと主張する。非執着の哲学を説いて、肉体は殻に過ぎない、ものの外側は実体ではない、神との一体化のみが実体だと主張するのだ<sup>(6)</sup>。

「テディ」のメッセージは、ひとことで言うと、あらゆる執着を捨てよという仏教の教えである。しかしよく考えてみると、一番執着を捨てなければならなかったのは、サリンジャー本人だったのではないだろうか。彼が一番人に執着し、人に期待しすぎ、人に絶望した人間であった。おそらく「テディ」を通して、サリンジャーは自らに訴えていたのだ。自分こそが執着を捨てなければならないのだと。

だが彼の人一倍執着の強い性格が変わることはなかった。彼にはあらゆることに関してこうであらねばならないというこだわりがあり、そこから少しでも外れると、それが許せない。人間関係においてそれは顕著で、裏切りに対しては容赦ない措置をした。彼にとって人は二種類しかなく、自分の味方か、さもなければ敵であった。「グラス家物語」の一つ「ゾーイー」（“Zooney”）の中で、グラス家の母親は言う「あんたもバディも好きじゃない人どう話をすればいいのか知らないのね。……会って2分ほどで好きになれない人とは、もうそれっきりおしまい。……そんなに好き嫌いがひどかったら、この世界で生きていけませんよ」<sup>(7)</sup>。この指摘はそのままサリンジャー本人に当てはまる。彼は自分が本当に心を許せる相手を「ランズマン」と呼び、そういう相手のためにはあらゆることをした。しかしそういう心を許す相手でも、一度でもサリンジャーの意にそぐわない行為をすると、途端に敵にされてしまった。そして一

度敵にされてしまうと二度と以前のような友人関係に戻ることはない。そのようにサリンジャーは次々と周りの友人たちを切り捨ててきた。

サリンジャーを語る上でウィット・バーネット (Whit Burnett) は欠かすことの出来ない人物である。サリンジャーが作家としてデビューするきっかけを作ったのがバーネットだった。サリンジャーはバーネットからコロンビア大学の創作コースで教わり、バーネットの雑誌『ストーリー誌』(Story) で作家デビューを果たした。二人は数え切れない程の手紙のやりとりをした。最初バーネットはサリンジャーが送ってきた作品の雑誌への掲載を断ることが多かったが、サリンジャーが売れてくるにつれて徐々に二人の力関係は逆転していく。二人の関係がこじれた一番大きな理由は、サリンジャーが熱心に求めていた短編集『若者たち』(Young Folks) の出版をバーネットが拒絶したことだった。

1959年11月、『ライ麦畑』の大成功でバーネットよりもはるかに強い立場にいたサリンジャーのもとにバーネットから手紙がきた。10年ほど前から不振に陥っていた『ストーリー誌』を再興しようと考えたバーネットは、手許にあった未発表のサリンジャーの作品を二編雑誌に掲載させてもらえないかと頼んできたのだ。この二作品は何年も前にバーネットの方から掲載を断ったものだった。サリンジャーが作家として成功した後になって、それらは価値を持ち始めたのだ。

サリンジャーの態度は冷徹なものだった。代理人を通じて彼は、その依頼を断るだけでなく、その二編の原稿の返却も求めたのだ。二人の友情に完全に終止符が打たれた。その後バーネットが何かを頼んできて、サリンジャーは一切応じることはなかった (Slawenski 322-323)。

バーネットの他に、サリンジャーが、最初は尊敬していたにもかかわらず、後に関係を断絶する重要な人物にジェイミー・ハミルトン (Jamie Hamilton) がいる。ハミルトンは『ライ麦畑』をイギリスで出版する権利を手に入れたヘイミッシュ・ハミルトン社の創立者であった。性格的にも似ていた二人はお互いを尊敬し合っていたが、イギリスでのペーパーバック版『ナインストーリーズ』の出版をめぐることもめることになる。その短編集の表紙が、安っぽい三文小説の装丁をしていたのである。サリンジャーは本の表紙についてただならぬこだわりを持っていただけにショックを受けた。彼にはハミルトンが最初から利益優先で、『ナインストーリーズ』を低俗な本にしようとしているとしか思えなかったのだ。サリンジャーはそれまで幾度となく様々な編集者から、作品の中身を大幅に削られたり承諾なく作品名を変えられたり、裏切り行為としか思えない仕打ちを受けてきた。そんなサリンジャーはまたしても編集者に裏切られたと思った。しかもその裏切りは、最も高く評価していた編集者からのものだったのだ。ハミルトンは理解と許しを求めたが、激怒したサリンジャーは、ハミルトン社から汚されるよりは、出版しない方がましだと伝えた。それが10年近く親友だった二人の最後の対話だった。サリンジャーはその後、ハミルトンに一言たりとも声をかけることはなかった (Slawenski 325-326)。

サリンジャーの娘マーガレット (Margaret A. Salinger) は『我が父サリンジャー』 (*Dream Catcher*) というサリンジャーの伝記を書いているが、その中で、まだ幼い頃に起こった次のようなエピソードを語っている。

学校からの帰り道、車の中で父と私が口論した後、父がその問題を話し合うために電話をしてきた。当時10歳だった私はそれをずいぶん大人な行為だと思った。その会話を今も正確に覚えている。父は仲直りする方法を見つけるべきだと言った。その理由は「自分は人といったん関係を終わらせてしまうと、二度とその関係を元に戻せないから」というものだった。……父はこう言って話を終えた。「パパはこれからもずっとお前を愛するだろう。でもある人に尊敬の気持ちをもてなくなると、それでその人との関係は終わってしまう。永遠にね」。(8)

この会話にサリンジャーの、他人との関係の持ち方がはっきりと言い表されている。まさに「ゾーイー」の中で書かれていたように、彼には敵か味方しかいないのである。そして一度相手を敵と見なしてしまうと関係を永遠に絶ってしまう。尊敬の気持ちを持ってなくなるというその点だけで関係が永遠に断絶してしまうのだ。

それを目にする、そこまで言うサリンジャー本人は一体何様なのだと言いたくなってくる。常にいかなる時も人々の尊敬に値するだけの完璧な人間であるとも言えるのだろうか。サリンジャーの言動を見る限り、彼自身は自分を完璧だと考えていたふしがある。マーガレットは次のように父親の完璧主義を非難している。そしてなぜ「グラス家物語」の登場人物たちに子供が多いのか、さらには「グラス家物語」の主人公シーモアが今は亡き子供なのかという点についても鋭い指摘をしている。

父は彼の最も愛していた創造物である「聖者」シーモアを世に出してすぐに殺してしまった。さらに、彼が生きながらえることを許した人物たちは、大人になることを許されなかった。彼らは永遠にサリンジャーの若さのネバーランドに閉じ込められている…。

私は自分の息子にそれとは違う世界を知ってもらいたい…。

何よりも、いくつも選択肢があることを知ってもらいたい。完璧と破壊の間に、天国と地獄の間には肥沃な中州があることを知ってもらいたい。人を許すことを知ってもらいたい。……父にはそれができない。彼の世界では、欠点があるものは追放されるべきものだ。欠点がある者は逃亡者であり裏切り者である。父の生活に生きている人間が欠けていることも、父の小説の世界に余りにも多くの自殺が目立っているのも、不思議ではない。

(M. Salinger 417-418)



このように彼は周囲の人々に対して、そして作品中の登場人物に対しても、強い執着を持って接した。頭の中では「テディ」で主張されているように執着はいけないうことだと分かっているながら、執着することをやめることができなかったのである。そして彼の執着は最終的に読者にまで向かう。彼は読者にある態度を求め、それを受け入れない読者は容赦なく排除するのである。

「グラス家物語」の一つである「大工よ、屋根の梁を高く上げよ」(“Raise High the Roof Beam, Carpenters”)の中で、サリンジャーの分身であるバディはシーモアを敬愛しているが、その行動全てを理解しているわけではない。シーモアの行動には自分勝手に時に残虐と思えることもある。例えば、シーモアが結婚式当日にミュリエルを放棄したことや子供の頃にシャーロット・メイヒューに石をぶつけたことなどだ。

「大工よ」に見られる他者の受容は論理ではなく信仰に基づいている。シーモアはミュリエルをその物質主義にもかかわらず受け入れている。物語が結末に至っても、バディは兄がなぜ子供の頃に愛らしいシャーロットに石を投げて顔に大けがを負わせたのか理解できない。当然読者も同様に理解できない。もし我々がシーモアを受け入れようとするのであれば、我々は彼のあらゆる面において彼を受け入れなければならない。論理は捨て、シーモアがしたことを全て正しいことと受け入れることがバディにとって真の信仰の実践なのだ。そして読者である我々にもその信仰の実践が要求される。そしてそれが嫌なら、今すぐ本を閉じて、読者であることをやめればいいとサリンジャーは考えている。自分を受け入れようとしない読者がいても彼はいっこうに気にしない。そこには、かつて「自信たっぷりの俗物」と「繊細なアウトサイダー」の和解を模索していた頃のサリンジャーの姿はない。おそらく『ライ麦畑』の成功で立場を強くしたサリンジャーは、自分に対立するもの全てを和解ではなく、排除する方向へと進んだのだ。

かつてサリンジャーは、『ニューヨーカー誌』(New Yorker)の方針を完璧さの基準として用いて、作品を揺るぎないものにしようとしていた。しかし1959年には、彼は完璧さとニューヨーカー誌の要求する客観的な欠陥のなさとの違いに気づき始めていた。その違いは精神的なものであった。「ゾーイー」の中でフラニーが兄に「神の女優になれ」と言われたように、サリンジャーは自分を神の作家だと考えていた。1959年にサリンジャーは「シーモア序章」(“Seymour: An Introduction”)を発表するが、この作品に価値があるかどうか最終的な裁決を下すのは『ニューヨーカー誌』でも批評家でもなく、さらには読者ですらなかった。それは神自身でしかなかった。

この頃のサリンジャーには頼れる友人がほとんどいなかった。多くの友人と縁を切ってきたのだ。ハミルトンともバーネットともやり直せる見込みもほとんどなかった。そして記者たちに彼のことをしゃべった人たちもすぐに切り捨てられた。サリンジャーは周囲の人々をことごとく敵と見なしたが、それは明らかに極端で事実と反した見方だった。事実、彼の周りには敵

ばかりがいたわけではない。味方と思われる人たちもたくさんいた。例えば、『キャッチャー』は1954年カリフォルニア州の教育委員会が初めて問題にして以来、この本を検閲し、教室から追放し、教師には推薦させないようにしようという試みが何度もなされた。しかし1962年の調査では、カリフォルニア州の大学教授たちはこの小説を学生に薦める本のトップにあげているのである (Slawenski 344)。

1965年、サリンジャーの最後の作品「ハプワース」が発表された。「ハプワース」におけるシーモアとそれ以前の人物たちには重大な相違がある。この作品におけるシーモアはその神聖さにおいては完璧に近くなる一方で、かつてホールデンが実現させた俗物たちとの和解からは遙か遠いところまで退いてしまっている。キャンプ・ハプワースのシーモアはテディの寛容さ、そして「大工よ」でバディが知る無差別の教を忘れてしまっている。多くの批評家が「グラス家物語」における幼いシーモアにリアリティの欠如を見ており、それがこれらの物語が失敗した原因だと考えている。以前の作品に比べるとこの作品は、批評家からの批判は少なく、むしろ無視された。サリンジャーは誰からも理解されない作品を残し、表舞台から姿を消し、生涯にわたって沈黙を続けたのである。

### III 愛と憎しみ

「ハプワース」は、ただ読者がシーモアやバディという人物をサリンジャー同様に愛していなければ成立しない作品に成り下がってしまっている。サリンジャーは、破綻した物語、非現実のファンタジーを受け入れる読者のみを集めて、自分にとって都合良く心地よい集団を形成しようとしたのだ。

チャールズ・ダーウィンの進化論から文学作品を読み解こうとした進化論批評を提唱したジョセフ・キャロル (Joseph Carroll) は、作家が芸術作品を生み出す目的は社会操作と性的誘惑であるという文学批評家たちの意見を踏まえた上で、「この視点から言うと、作品を書くことは周囲の注意を喚起し、名声を得るための一つの方法であり、このようにその人の繁殖の可能性を大きくしてくれるのである」と指摘している<sup>(9)</sup>。進化論的に言えば、全ての生命は自分の遺伝子を後世に残すことがその目的の全てである。環境に適応できた者だけが生き残り、その遺伝子を後世に残すことが出来る一方、適応できなかった個体は淘汰されていく。淘汰には二種類あり、自然淘汰と性淘汰がある。個体にとってはまずこの世界で生き延びることが重要である。ただしそれだけでは不十分で、個体はその遺伝子を後世に残すためには、異性のパートナーを獲得し繁殖する必要があるのだ。

先ほど言及したキャロルの考えは、特にそのうちの性淘汰において、作家が他者よりも優位に立つために作品を書くという側面を指摘している。確かにサリンジャーの場合、その考えはよく当てはまる。まず作家として成功することにより、経済的に困らなくなり、自分が芸術的

だと考へる作品だけを書くことを許されるようになった。さらに、作家として有名になることによつて、彼は多くの若い女性を魅了した。もともと彼は長身でハンサムだったので、セックスアピールはあつたのだが、世間から身を隠すミステリアスな作家として有名になつた後に以前よりもはるかに多くの若い女性がファンとなつたことは事実である。そしてジョイス・メイナード (Joyce Maynard) のように親子ほども年の差のある若い女性がサリンジャーのもとに吸い寄せられていったのだ。

メイナードの自伝『ライ麦畑の迷路を抜けて』 (*At Home in the World: A Memoir*) を読むと、当時18歳だつた彼女が当時53歳だつたサリンジャーにうまく口説き落とされていく様子が生々しく描かれている。彼はまるでカルト教団が洗脳のテクニックを用いて入信者を増やしていくように、巧妙なテクニックでジョイスを籠絡していった。まずは彼女を褒め称え自分に対する絶対的な信用を得、次にそんな彼女を評価しようとしなない世間を悪と決めつけ憎しみを煽り、彼女を唯一理解できるのは自分だけだとし、彼女を家族や周りの世界から孤立させ、最後には彼女をコーニッシュの田舎に呼び寄せることに成功する。そして自分の意にそぐわなくなつた時点で簡単に彼女との人間関係を断ち切ってしまう。ジョイスに対してだけでなく、おそらくかなり多くの女性がそのようなプロセスでサリンジャーと関係を持ち、関係を絶つていったのだと思われる。

サリンジャーがジョイスに用いた洗脳のテクニックを目にすると、彼の作品における別の側面が浮かび上がる。『ライ麦畑』を筆頭に、サリンジャーの作品には純粹無垢な子供の愛が描かれているという通説の裏には別の顔があるのではないだろうか。その身内だけの深い愛の陰には、それ以外の人間への憎しみがあるのではないだろうか。事実彼はジョイスに対して世間を憎むように仕向け、最後には自らの家族をも憎むようにさせ、家族との関係が絶たれたジョイスにはサリンジャーしか頼るあてがなくなつたのである。

そう考へると、なぜジョン・レノン暗殺事件の犯人のマーク・チャップマンやレーガン大統領暗殺未遂事件の犯人ジョン・ヒンクリー・ジュニアがあれほど熱心に『ライ麦畑』を愛読していたのかに一つの答えが出せるかもしれない。サリンジャーは世間から疎外感を感じている若者の憎しみを利用してゐたのかもしれない。グラス家への偏愛はその周りの世界への憎しみをかき立てるのである。

18歳の大学生であつたメイナードは、自身にとって神のような存在だつたサリンジャーを愛した。それだけに、その後彼に捨てられた時に精神は極めて危うい状態になり、何年もその傷から癒やされることはなかつた。時間をかけてようやく元の自分に戻り、結婚をして、子供の生み、幸せな家庭を築いた。作家となつて一定の成功を取めた時、彼女はサリンジャーとの関係を本にした。その本が仕上がつた時、彼女はサリンジャーに会いにコーニッシュの彼の家を訪ねた。その時の様子を彼女は次のように描写している。

彼（サリンジャー）の全身は震えていた。そして彼の目は私の方をじっと見つめていた。まるで言葉で言い表せないほど恐ろしい光景を見ているかのようであった。

「お前の問題点は、ジョイス、それは、お前は世界を愛しているってことだ」。

「そうよ」と私は微笑んで言った。「私は世界を愛している。そして同じく世界を愛している三人の子供を育てたわ」。

「お前はつまらん人間だ」と彼は言った。「価値のない人間だ」。(10)

## 結論

作家としての習作時代からサリンジャーは二元論的対立に苦しんできた。精神と物質、芸術主義と商業主義、それらの対立は彼の作品において「繊細なアウトサイダー」と「自信たっぷりの俗物」として描かれた。初期の短編「ヴァリオーニ兄弟」や中編「倒錯の森」にはそれぞれを代表する人物が描かれ、その葛藤がメインテーマとなっている。

もともと精神世界に価値を見だし、芸術至上主義的傾向が強かったサリンジャーは『ライ麦畑』の成功により、一気にその方向へと舵を切る。『ライ麦畑』の成功は彼に経済的成功と作家としての確固たる地位を与え、サリンジャーは長年悩まされてきた「自信たっぷりの俗物」を無視することが出来たのだ。

作品の中で、精神性に価値を置く東洋的な宗教思想を展開し、無執着の教えを主張してきたサリンジャーだったが、物事に執着しすぎる自身の性格を変えることは出来なかった。その性格のせいで、バーネットやハミルトンといった作家としてのキャリアを築く上で助けとなってくれた友人たちとも次々と絶縁してしまう。これは一人の人間としての彼にとって大きな損失であった。自分と考えを異にする友人との絶縁は、彼が人間として成長するチャンスの喪失へとつながった。

さらに、そのような偏狭な考えは彼の作品世界の中にも顕著に表れてきて、サリンジャーは、無条件に自分を受け入れてくれる読者のみを相手にするような作品を書くようになっていく。リアリティあふれる人間性の描写ではなく、一方的に東洋宗教の価値を説く描写がメインになってしまった結果、彼の作品における芸術的価値は大きく低下してしまった。

進化論批評家のキャロルは、作家が作品を書く動機の一つとして、性淘汰において他者より優位に立つためという点を挙げている。サリンジャーの場合もその点が当てはまる。当時18歳の少女だったメイナードとの関係では、彼女の憎しみをかき立て、彼女の人生をコントロールすることに成功した。そう考えると、作家として成功した時点で、サリンジャーは、バランスのとれた人間性や芸術性の追求よりも性淘汰における優位性の追求に重きを置き始めたのかも知れない。

サリンジャーの周囲にいて心傷ついた女性たち、娘のマーガレットやかつての恋人メイナード

ドの自伝を読んでいると、彼女たちの痛切な心理描写が読者の心に突き刺さってくる。彼女たちは共通してサリンジャーという男の何が問題だったのかという問いを発している。

サリンジャーの問題は、他人に執着を持ち過ぎたこと、そしてそれゆえに自分の期待に応えてくれない他人を許すことができなかったことである。しかし奇妙なことに「テディ」やその他の作品の中でサリンジャーは、執着を持たないことや他人を許すことの大切さを説いていた。作品の中では無執着の教を説きながら、実際の生活においては、彼は愛と憎しみに翻弄されたのだ。彼は何よりもまず自分の心の声に耳を傾けるべきだったのではないだろうか。

〔注〕

- (1) Hassan (1962: 139-140)
- (2) Slawenski (2012: 57)
- (3) Hamilton (1989: 75)
- (4) French (1976: 57-58)
- (5) J. Salinger (1947: 95)
- (6) J. Salinger (1953: 284-285)
- (7) J. Salinger (1961: 99)
- (8) M. Salinger (2000: 229)
- (9) Carroll (2004: 115)
- (10) Maynard (1998: 344)

〔引用文献〕

- Carroll, Joseph. *Literary Darwinism: Evolution, Human Nature, and Literature*. New York: Routledge, 2004.
- French, Warren. *J. D. Salinger*. 2<sup>nd</sup> ed. Boston: Twayne, 1976.
- Hamilton, Ian. *In Search for J. D. Salinger*. New York: Vintage Books, 1989.
- Hassan, Ihab. "The Rare Quixotic Gesture." Henry Anatole Grunwald ed. *Salinger: A Critical and Personal Portrait*. New York: Harper & Row, 1962. 138-163.
- Maynard, Joyce. *At Home in the World: A Memoir*. New York: Picador, 1998.
- Salinger, J. D. "The Inverted Forest." *Cosmopolitan* (December 1947). 73-109.
- . *Nine Stories*. Boston: Little Brown, 1953.
- . *Franny and Zooey*. Boston: Little Brown, 1961.
- Salinger, Margaret A. *Dream Catcher*. New York: Washington Square Press, 2000.
- Slawenski, Kenneth. *J. D. Salinger: A Life*. New York: Random House Trade Paperbacks, 2012.

(もちどめ こうじ 英米学科)

2014年11月17日受理